

八月十五日は終戦記念日でした。第二次世界大戦の話を書く機会が多いと思いますが、自分の身内から話を聞いたことがある人は少ないと思います。私は、以前祖母から曾祖父の戦争体験を記したものをもらっていたのでこれを機に読んでみることにしました。

戦争で日本国土まで悲惨さを感じ出したのは1945年2月頃でした。その時、曾祖父は航空機製作所に勤めていましたが、戦闘機増産のため家族を残し、単身赴任していたそうです。しかし、翌朝会社を見ると、街は爆撃されて火の海へと変わっていました。曾祖父は家に戻り、家族と共に実家に疎開しました。新聞やラジオは国のために良いことだけ、いち早く誇大情報として流していましたが、知らせたくない情報は伏せようとしていました。

家のあった京都では、敵機が近づくと空襲警報のサイレンが鳴り響き、またたく間に、アメリカの巨大な爆撃機B29が十機一組ぐらいになって飛来して来ました。すると皆は蟻が巣を壊されたように逃げまどい、サイレンが空襲解除を知らせるまで潜んで居るのでした。

3月上旬に曾祖父に戦地従軍の召集令状の電報が入りました。聖戦とうたう看板の下で天皇軍国主義の「命令と絶対服従」の思想に国民は洗脳されており拒むことは出来ません。曾祖父は外見上においてもあまり健康ではなく、わざわざ死に行くような気がして、これがこの世の家族との最期かと名残惜しさが胸の中で募りました。家の前に出て見送ってくれる皆に、手を強く強く振りあげました。曾祖父は歩兵連隊に入隊し、中国の農村と山岳地帯が混じったような土地に着きました。ここでは食糧不足の日本では食べられなかった肉や野菜や米や甘い物も何不自由なく食卓に出ました。曾祖父は読み書きができ、会社で事務的なことをしていたため、基礎訓練は少なくて助かりました。

長崎や広島にえ体の知れぬ原子爆弾が投下され、天皇の終戦詔勅が出たと、10月ごろになって聞かされました。終戦は8月15日のため二カ月ほど遅れての知らせです。そして、11月頃武装解除になり、人の目を逃げるように帰省しました。京都に着き、家族の安全が分かると喜びの涙があふれ、言葉にならなかったそうです。そして、最後に二度とこのような苦悩と心痛の悲惨は繰り返してほしくないと思いました、と書かれていました。

この記録の後に、一才であった祖母のことが書かれていました。祖母は、一才になるときには皆と一緒に物を食べていたそうです。また、苦しい生活はどこも同じでしたが、「勝つまでは、ほしがりません」であったため盗んだり人を殺めたりすることはありませんでした。

私はこの曾祖父の記録を見て、戦争に行っていたことに驚きました。これは、私の母でも知らなかったことでした。学校でお話を聞いたり、戦争の映画、テレビ番組を見たりしていたので、戦争について理解しているつもりになっていましたが、曾祖父の言葉で伝えられた記憶はどんな物より心に響き、実際に体験しているように感じました。曾祖父やその時代を生き抜いてこられた方々のお蔭で、私達は何不自由なく平和な世界に生きることができています。私をふくめ、現代の子どもは食べ残しが多いです。それは、物が多く存在し食べ物に感謝する気持ちが「いただきます」の一言で終わってしまっているからだと思います。今ある環境全てに感謝することを忘れない社会になってほしいと強く願います。